

健康食品と食品薬学



巻頭言

小林 資正*

Functional foods and pharmaceutical food science

Key Words : pharmacognosy ; crude drugs ; food supplement ; functional food

高齢化社会を迎えた今日、人々の健康への意識が高まるにつれて、サプリメントや健康食品の需要がどんどん高まり、その結果、健康食品業界が一大産業となっている。生活習慣病を予防して健康の維持増進に役立つ保健効果が期待される特定保健用食品（特保）としての認可を受けるには、どこの国にせよ過去に食経験のある植物の成分であれば、動物や人での有効性と安全性のデータが揃えられれば、特定保健用食品（特保）としての認可を受けることが比較的簡単にできると聞く。製薬企業での医薬品開発が十数年の年月と数百億円の経費が投入されて行なわれているのに比べるとかなり簡単に認可が受けられるようである。

漢方処方の場合には、これまでの長い年月に蓄積されてきた疾病に対する治療実績に基づき、医薬品として承認されている。それぞれの処方には複数の生薬がある比率で用いられ、その煎液を服用することにより治療効果を期待するわけであるが、現在ではエキス剤が主に用いられている。処方に配合されるそれぞれの生薬に含有される個々の成分の化学構造とその酵素レベルや細胞レベルでの作用についてはすでに詳しく調べられてはいる。しかしながら、漢方処方は長期にわたって服用することで体質改善が期待される薬物である。したがって、漢方処方剤に含まれる数多くの薬効成分が複合的にどのよう

に人体に作用しているかを解析するのは非常に難しい研究テーマである。ケミカルバイオロジーなる新しいテクノロジーが導入され注目されているが、生薬学・天然物化学の研究者にはヒトに対する作用を直接に調べることは規制がありできないことから、なかなか研究の進展が見られないのが現状かと思う。

同じ様に、各国で伝統的に疾病の治療に用いられてきた薬用植物についても成分研究がなされてきている。これまで伝承されてきた治療効果は薬用植物に含まれる多くの成分が複合的に作用していたと考えられるが、漢方処方のような蓄積された治療実績がない場合には、医薬品としての開発が難しいばかりでなく、先にも述べた様に食品としての利用経験・実績がないものについては、特定保健用食品としての開発も難しそうである。

数多くの健康食品が世の中に出回り、その薬理作用を期待させる巧妙な宣伝効果を信じて購入され、健康でありたいと願う多くの方々により消費されている。それらの健康食品の中には、確かに薬効が期待できるものも多くあるであろうが、中には、薬効どころか危険な副作用を発現するものもあることを危惧する。残留農薬や有害物質の食品への混入が社会的な問題になっている昨今、「食の安全・安心」という言葉がよく使われるように健康食品の安全性に高い関心が寄せられていることから、健康食品に添加されている薬用植物の抽出物の薬効や有効性についてもっと詳しく解析する必要がある。そのためには、健康食品産業界からの支援（研究助成）が得られて、しっかりした基原および産地、収穫時期、抽出方法等の規格の薬用植物の抽出物が示す薬効や有効性についての「食品薬学研究」が精力的に推進され、信頼できる科学的な評価が着実に蓄積されていくことを期待する。



* Motomasa KOBAYASHI

1951年7月生
 大阪大学・薬学部・製薬学科（1974年）
 現在、大阪大学 薬学研究科 教授 薬学博士 天然物化学
 TEL : 06-6879-8215
 FAX : 06-6879-8219
 E-mail : kobayasi@phs.osaka-u.ac.jp